（別紙様式2）

令和3年度 学校評価報告書

園名	三輪　幼稚園

1 教育目標

『元気いっぱい　みわっ子』
・友達と協力できる子どもを育む
・やさしく思いやりのある子どもを育む
・自分で考えて行動する子どもを育む
（八景中学校区共通目標）
人も自分も、学校（園）もふるさとも　大切にできる子

2 今年度の重点目標

「自分たちで遊びを創りだし、遊び込む子をめざして」

～子どもが「もっとやりたい」と思える援助や環境構成の工夫～

3 総合的な自己評価

今年度の重点目標を基に、「子どもたち主体」の生活を大切にし、一つ一つの活動を見直したり、子どもたちと相談したりしながら保育を進めることができた。
また、特別支援教育では、一人一人に応じた支援方法を探り、保護者と相談したり、職員間で個の特性等を共有したり、関係機関と連携したりしながら取り組むことができた。
地域との連携は手紙のやり取りなどを中心に進める工夫を行った。
今後も、職員が力を合わせ、保護者への発信方法を工夫しながら、地域と連携して子どものよりよい育ちを目指し、園教育の充実を図っていきたい。

4 総合的な学校関係者評価

一人一人の個性や発達に寄り添いながら保育を進め、年齢に応じた形で、話し合ったり、考えたり、作ったりする時間を十分に設け、指導していくことで学びを深め、自信や達成感につながっていたと考えられる。今後もタイミングのよい援助を心がけ、幼児の意欲の高まりにつなげてほしい。
取り組みを保護者を含む多くの人に分かりやすく伝えるためにも、紙媒体通信の簡素化やホームページの活用を検討していく必要がある。今年度から導入のメール（ミマモルメ）活用は、細かな連絡に有効だと感じた。
感染防止対策については、誰もが安心して生活できるよう努めていたと感じる。

5 評価結果

自己評価				学校関係者評価
分野・領域	評価項目（取組内容）	評価結果及び分析	改善の方策	学校関係者評価委員会の意見
教育課程	学びに向かう力を育む保育内容の工夫 ・自分から挑戦し、継続して取り組み、やり遂げようとする遊びや体験の工夫 ・友達と伝え合いながらつながりを深め、遊び込む活動の工夫 ・互恵性のある異年齢交流の工夫 ・子どもの心に添った保育の創造と教師間の学び合いや連携	子ども達が「やってみたい」「もっとやりたい」「やりとげたい」と思えるような援助や環境構成の工夫を心がけ、取り組んできた。その中で、子どもの思いと教師の読み取りがずれてしまわないよう努めた。また、教師の発する言葉に着目し、振り返ることも取り入れた。子ども達はやりたい遊びに取り組む中で、試行錯誤したり、目標に向かったり、友だちと協働したりする姿が見られ、各学年に応じた力が徐々に育まれていると感じられた。 異年齢交流は感染対策を徹底しつつ、ペアを組んで“わくわく体操”をする等、できる範囲での互恵性のある交流ができた。	子ども達が「もっとやりたい」と思えるよう、タイミングのよい、子どもの思いに寄り添った援助の工夫、温かい見守りを今後も心がける必要がある。 また、各クラスの子ども達の様子を全職員で共通理解しながら取り組みを進め、教師自身の資質向上も目指したい。 園の取り組みをわかりやすく保護者の方に伝える方法も検討していく必要がある。	5歳児の保育室を1階に移したこと、当日又は前日の写真掲示を始めたことで、保護者は子どもたちの園での取り組みが理解しやすくなった。 行事を参観する中で、「自分の役割」と「友達の役割」を認識しながら協働する姿が見られ、適切な教師の援助がなされていると感じた。 異年齢間交流で教え合ったり、伝え合ったりすることが意欲につながる部分も見られた。 コロナ禍で、子どもたちの体力低下が危惧されるので、引き続き、体づくりにも努めてほしい。
子育て支援	親と子が触れ合い、仲間づくりができる交流の工夫 ・感染症予防に配慮し、親と子が安心して集える場の設定 ・未就園児の保育体験の場としての園児との交流の工夫	感染予防に努め、園庭開放を2回実施することができた。その中で、砂場遊びや固定遊具、芝生園庭でのサーキット遊び等に在園児の8割が参加し、未就園児と交流できる場となった。 保護者同士の交流は、密を避けながら実施できた。 地域子育て推進事業“げんき”には13組の参加者があり、ベビーマッサージと親子遊びを通して、0歳から3歳の子と保護者が交流することができた。	コロナ禍が続くと室内での活動が難しいので、園庭での取り組みに重点を置き、計画していく必要がある。来年度も戸外での子育て支援が中心になることが予想されるので、楽しい活動ができるよう、運動遊具や砂場道具の整備等を工夫していきたい。 また、できるだけ周知できるよう、掲示場所などを検討していく必要がある。	感染予防のため、中止になった行事も多かったが、園庭開放では運動遊具や砂遊びの道具等をたくさん準備し、芝生で思い切り体を動かして遊べるよい機会となった。未就園児との交流もその中で実現していた。 地域への発信方法を工夫し、大きな公園がない三輪地区の未就園児の親子も集える場となることを期待する。感染症が落ち着いたら、保護者同士の交流も活発にしてほしい。
特別支援教育	幼児一人一人の発達や特性をふまえた支援体制の整備 ・園内委員会の充実と職員の共通理解 ・一人一人に応じた支援計画の作成 ・家庭や関係機関との連携	幼児一人一人の発達や特性を踏まえた支援方法を職員間で情報共有したり、検討したりしながら進めることができた。また、個別に教育委員会や就学予定の小学校、福祉センター、療育機関などと連絡を取り合ったり、支援方法を共有したりしながら、コロナ禍でもできることを実践してきた。小学校に安心して就学できるような取り組みにも力を入れた。	今後も保護者と連携を密にし、支援方法について互いに理解しながら教育を進めていけるように努めたい。また、定期的な園内委員会に加え、必要な時には会をすぐに行っていけるよう、時間の確保に努める必要がある。	個別の支援、関係機関との連携が進められていると感じる。小学校での一人一人に応じた学びの場を考えていくためにも、園内委員会の更なる充実を期待する。また、公立幼稚園の役割としても、特別支援教育の充実を図ってほしい。 「いっぽの日（進級体験）」を設けたことは、3・4歳児の進級への安心感につながった。
校園所連携	保幼小中連携の推進と小学校への円滑な接続をめざした取り組みの推進 ・保幼、保幼小、幼小交流の推進 ・異校種の職員連携交流の工夫 ・中学校区連携推進への参画	保育園との交流は、1回実施。同じ小学校に進学する仲間がいることを知り、人とのかかわりの幅を広げる機会となった。 小学校との交流は、運動会の練習参観を実施した。3学期には、小学校の様子等をビデオ視聴し、参観では気づかないような部分にも繰り返し見ることで気付く姿もあり、就学への期待や安心感につながった。 保幼小担当者会を学期ごとに実施し、互いの取り組みや子どもたちの様子を情報交換し、連携を深めた。	職員間で話し合うことで得られる情報も多いため、子どもたちに動画、写真等を取り入れながら、細かく伝えていけるよう、連携を密にしていきたい。 また、感染状況を見極めたタイミングのよい交流が必要になるので、その点も心に留めておくことが大切である。 保育所との交流においては、遊びを通して十分にかかわれるよう、内容を精査していきたい。	小学校進学を見据え、子どもたちに安心感を与える取り組みは、評価できる。中でも、動画を用いて子どもたちに具体的に小学校の学習や生活の様子を伝えていったことは、就学への期待につながった。 保育園との交流では、他施設にも同じ小学校へ就学する友達がいることを知る機会となり、より就学への期待感の高まりを感じた。 今後は、中学校区で更なる連携推進を図り、義務教育終了までの12年間を見据えた子どもの可能性を引き出す教育環境づくりに取り組んでほしい。

※ 行は、適宜加除願います。